
イナズマイレブン～未来からの逆襲・愛は世界を救う～

奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブン〜未来からの逆襲・愛は世界を救う〜

【Nコード】

N8242Y

【作者名】

奏

【あらすじ】

未来からの脅威が再び円堂達に迫る。

王牙学園、第二の勢力をなめるチーム、ザ・バベル。

ある日、円堂と夏未は小さなことで喧嘩をしてしまう。

落ち込む夏未にザ・バベルの脅威がおそいかる！

夏未を攫われ、絶望する円堂。

そんな円堂の下に、かつての戦友達が集結する！

果たして、ザ・バベルとの勝負の行方は！？

そして、円堂は無事に夏未を取り戻すことができるのか！？

円堂達は高校生で、円堂と夏未は恋人同士です。そこらへんも並行して書けたらなと思っています。

オール主要キャラ、オリ敵キャラ登場します。

オリ技もたくさんあります。

第一話

雷門中学、涙の卒業式から二年後…。

F F Iを制したイナズマジヤパンやその他の者は各中学を卒業後、それぞれの進む道へと歩き出していた。

そのイナズマジヤパンでキャプテンを務め、今や日本で…いや世界では知らない者はいないと言っても過言ではない程の人物になった円堂 守は、中学卒業後はそのままエスケーター式の雷門高校に入学した。

この雷門高校は、中学と同じく雷門 総一郎が理事長を務めている。ただ、やはり多忙な毎日を過ごしているため学校にいることは滅多に無く、自動的にその権限は娘の雷門 夏未に引き継がれていた。これも中学の時と変わっていない。

そんな雷門高校のいつもと変わらぬ一日。時間はちょうど四時限目が行われている頃。

校舎の三階、その一番端の教室で夏未は、ウェーブがかかった赤茶色のロングヘアを靡かせ、グラウンドが見える窓際の席に座って、ぼーっと外を眺めていた。

一年、いや中学の頃から成績優秀な夏未は授業を聞かずともテストでは学年トップクラスに入っていた。

だが、いつもこうやって外を眺めている訳ではない。

基本的ち真面目な彼女は、例えどんなに簡単な授業でも怠けることなく、いつも真剣に取り組んでいる。

ただ時々、気まぐれに外を眺めていることがある。

その時は決まって、ある一点を見つめている。

グラウンドに設置された、サッカーゴール。

何の変哲もない、何処にでもあるサッカーゴールだが、それをジッと見ていると自然にある人物が浮かび上がる。

サッカーの為に生まれ、サッカーの為に生きているサッカーの申し子。

円堂 守、その人だ。

ゴールポストの前に立ち、迫り来るボールを身体を張って止める姿が瞼の裏に浮かぶ。

ボールを止めた後は、そのシュート一球一球に感想を述べ、仲間を激昂し、爽やかな笑いを顔一面に見せる。

その笑顔を思い出す度に、自然と頬が緩む。

そんな人物にハッと気づき、頭を左右に振って雑念を払う。

時々見せる、彼女の不思議な行動に教壇に立つ教師とクラスメートはいつも首を傾げていた。

教室に授業の終わりを知らせるベルがスピーカーから鳴り響く。

ここで夏未は、自分がこのクラスの学級委員だったことを思い出し、慌てて号令をかける。

その号令と共にクラスメートは、ガタガタと音を出しながら席を立ち、友達の下へ行ったり、購買へ昼食を買いにいたり様々だ。

机の上に広がった教材などをしまった夏未は、代わりに鞆から弁当箱を二つ出す。

一つは小さくて女の子らしいもの。

もう一つは女の子が食べるには大きすぎるもの。
その二つを持ち、席を立った。

その時、廊下からドドドドドツという地響きのような音が聞こえてきた。

廊下側の窓を、黒い人影が横切る。
次の瞬間、後ろの引き戸が勢いよく開かれ、大きな声が教室内に響いた。

円「夏末！ 弁当！」

そう叫んだ男は、肩で息をしている。
余程、急いできたようだ。

夏「そんなに大きな声出さなくても、聞こえるわよ」

溜息をついて、呆れた様子の夏末。
クラス中の視線が集まる中、そんなものは気にもかけずスタスタと男の下へ歩いていく。

夏「行きましょう、円堂くん」

円堂と呼ばれた男は、おう！と嬉しそうに頷き、そのままズンズンと、歩いて行った。

チラッと教室内を一瞥した夏末は、ピシヤリと扉を閉めてその後を追った。

円「あー！腹減ったー！」

場所は代わり、屋上。

午前の授業で全精力を使い果たした円堂は、その疲れを吹き飛ばすかのようにゴロンと寝転がる。

見上げると、そこには雲一つない澄み切った青空。

外は少し肌寒いが、真南に昇る太陽の光がそれを中和してくれる。

んーっ、と伸びをしている円堂のそばにゆっくりと夏未は腰を降ろした。

持っていた弁当のうち、大きいほうを円堂に差し出す。

夏「はい」

その包みを見た円堂は「待ってました！」と言って、嬉しそうに夏未から受け取った。

さっそく包みを解き、箱の蓋をパカッと開く。

円「おおー！」

その中身を見た円堂は、目をキラキラと輝かせて感激の声を上げた。唐揚げ、卵焼き、ミートボールと豊富なおかずが弁当のはにキレイに並べられている。

残りの半分には、三角形に握られたオニギリが所狭しと並んでいた。

円「いただきますーす！」

夏「召し上がれ」

いつも礼儀正しい円堂に夏未は微笑みながら答える。

その返事を聞くと、円堂は弁当をガツガツと食べ始めた。余程、腹が減っていたのだろう。

片手に箸を持ってオカズを取り、もう一方の手にはオニギリが握られている。

それを交互に食べ、口いっぱい頬ばった。

「そんなに慌てて食べたら、また…」

「ぶっ！？ ゴホッゴホッ！！」

「ほら、言わんこっちゃない」

詰め込みすぎた為、喉にオカズを詰まらせた円堂がむせる。その様子を呆れ顔で夏未は見た。

「そんなに急がなくてもお勉強はにげないって、いつも言ってるでしょ」

やれやれ、と思いながら夏未は持つてきていた水筒を円堂に渡す。ドンドンと胸を叩いていた円堂は、それを受け取りフタを開け、一気に喉に流し込んだ。

「んぐっ…んぐっ…ぷはー！あー死ぬかと思った！」

麦茶で全て流し込み、大きく息をつく。後少して窒息したかもしれない。

「まったく…いつも急ぎすぎなのよ、円堂くんは」

自分の弁当箱から卵焼きを一つ摘み、口に運びながら言う夏未。

「へへっ…夏未の弁当上手いから、ついがつついちまうんだよな」

鼻の頭を人差し指でかきながら、明るく笑う円堂。

その言葉を聞いて思わず頬が緩みそうになるが、夏未は素直に喜びを表現できない。

「あ、当たり前でしょ。私が作ったんだから」

プイとそっぱを向いて、すぐに可愛くないことを言ってしまう。その度にいつも思う。

なんで自分はこんなに可愛くないんだろう。

なんでもっと素直になれないんだろう。

昔から人一倍プライドが高かった。

雷門財閥の党首、雷門 総一郎の一人娘として幼いころから受けてきた英才教育。

お嬢様として育ってきたその性格は、そう簡単に直るものではなかった。

と言っても、円堂達に出会ったことで少しは丸くなったようだが。

「はは！そうだったな！」

そんな夏未の態度にも円堂は文句一つ言うことなく、むしろ、それでこそ夏未だと思っている。

再び弁当に箸をつけ、さっきよりは遅めに食べて、料理一つ一つに

「上手い！上手い！」と感想を述べていた。

そんな円堂をチラッと横目で見て、夏未は優しい笑みを浮かべた。

第二話

円「好きだ！夏未！」

意外にも、先にその想いを伝えたのは円堂の方だった。

夏「…へ？」

突然の告白に、夏未はこう返すことしかできなかった。

高一の夏。

円堂は当然サッカー部に入部し、夏未もマネージャーとして入部することを決めた。

当初、円堂は世界を制したイナズマジャパンのキャプテンということで、学校中から注目を浴びた。

男子からは憧れの、女子からは好意の眼差しで見られていた。

高校に入学してから、円堂は一気に大人っぽくなった。

中学の頃の少し幼かった顔はキュッと引き締まり、身長も175cmと伸びた。

見た目は大人になったが、中身は未だ少年の心を忘れてはいないようだった。

人懐っこくも爽やかな笑顔。

練習中に仲間と肩を組みながら見せるその笑顔に、そのギャップに円堂のファンクラブができるほど。

練習中には必ずと言っていいほど、グラウンドの周りにはファンが

集まり円堂に声をかける。

夏未は、嫉妬と不安に駆られる日々を過ごしていた。

自分の想い人がそんな状況にあつては当然かもしれない。

いつまで経っても帰らないファンに夏未は

夏「練習の邪魔になります！すぐに帰りなさい！これは理事長の言葉と思つてくれてかまいません！」

と、目くじらを立てて叫んだ。

この理由も事実だが、本当は円堂をこれ以上ファン達に見せたくなかったからである。

円堂も似たようなものだった。

入学当初から、夏未の他とは比べものにならないルックスは、すぐに男子生徒からの注目を集め、理事長の娘ということもあり、その期待度は高まった。

告白されることは月に何回もあり、もちろん夏未は全て断った。

好きな人がいる、と。

それでも告白の回数は留まることを知らず、自分のルックスに自信がある者は、何としてでも夏未を手に入れようと躍起になっていた。

そんな毎日に夏未はうんざりしていた。

その都度、円堂相手に愚痴を言う。

夏「もうっ…毎日毎日、いい加減にしてもらいたいわ」

ブンブンと怒っている夏未に円堂は苦笑いで答えていたが、その胸中は穏やかではなかった。

円堂も、夏未が人気があることは知っていたし、告白を受けること

も知っている。

夏「また呼び出されたから、ちょっと行ってくるわ」

毎回溜息をつきながら、渋々と指定場所に向かう夏未。

その後ろ姿を円堂はジッと見ていた。

その目には、微かに不安の色が伺える。

夏未が告白を断ることはわかりきっている。

だがもし、その告白を受け入れら？

夏未が誰かと付き合うことになったら？

そう考えると、円堂は言い表すことのできない複雑な気持ちになった。

どうして、こんなにも胸が苦しいんだ？

どうして、夏未が告白されることがこんなにも腹立たしいんだ？

中学からの親しい仲だから？

夏未がサッカー部のマネージャーだから？

いくら考えても、こういうことに疎い円堂は答えを見つけ出すことができなかった。

そんなある日、事件が起きた。

いつも通り辛く退屈な授業を終え、真っ先に部室に向かい練習着に着替え、グラウンドに出る。

準備体操を行い、リフティングを繰り返していると続々と他の部員

が集まってきた。

全員集合すると、グラウンドの中央に集まり円陣を組み、三年生のキャプテンの掛け声で練習を開始する。

グラウンドの周りを走っている時に、ふとベンチの方を見た。マネージャーがせかせかと、水を用意したり部員のタオルを並べたりしている。

ただ、その中に夏未の姿は無い。

いつもなら、どのマネージャーよりも早く来て準備をしているのに。

また、告白でもされているのだろうか…。

そう考えると、気持ちが沈む。

ダメだ…練習に集中しないと…。

円堂は頭をブンブンと左右に振り、両頬をバチンッと叩き、気合を入れて雑念を振り払った。

だが、30分経っても、一時間経っても、夏未がグラウンドに姿を現すことはなかった。

三年生のマネージャーに尋ねても、知らないという。

流石に心配になった円堂は他の部員に、用事がある、と言って校舎へ走った。

円堂が夏未を探し回っている頃、その本人は…。

夏「（ん…ここは）」

夏未はゆっくりと目を開けた。

目に映るものは、埃が被った跳び箱やバスケットボールやバレーボールの入った鉄製のカゴ。

古くなって少し黄ばんだマット。

「夏「（ここは…旧体育館の倉庫？どうして、こんな所に……っ！？）」

ここで夏未は、自分が置かれている状況に気がついた。

夏「（か、身体が動かない！？ 声も…）」

両方の手足をロープのようなもので縛られ、口にはガムテープのようなものが貼られている。

どうにか手を動かしてロープを解こうとしたが、キツく縛られていてどうにもならない。

なんとか上体を起こし、壁にもたれかかる。

夏「（どうして…こんなことに…。はっ、そういえば…）」

夏未はこれまでの経緯を思い出した。

授業を終え、夏未はすぐにグラウンドに向かおうとした。

そこではすでに円堂が、一人でボールを蹴っているだろうと想像しながら。

するとその時、声をかけられた。

「雷門さん、ちょっといいかな」

見ると、一人の男子生徒が立っていた。
髪を金色に染め、目にかかるくらいまで前髪は長く、耳にピアスを
開けている。

制服は乱れ、カッターシャツがだらしなく飛び出している。
いわゆる、チャラ男と呼ばれる輩だろう。

夏未はその男を見て、少し眉を潜めた。
男はそれに気づくことなく話し始める。

「ちょっとさ、顔貸してくんない？」

前髪をクルクルと弄りながら、慣れ慣れしい態度の男。
腹が立ったが、グツと堪え冷たくあしらう。

夏「悪いけど、これから練習だから」

男から視線を外しながら、鞆に荷物を詰める。

「そう言わずにさあ。ほんのちょっとでいいんだ」

夏未の顔を覗き込みながら、顔の前で両手を合わせ頼んでくる。
もう一度断ろうとしたが、また別の日に来られるのも面倒なので、
今のうちに終わらしておくことにした。

夏「……少しだけよ」

「お、やりー。じゃあついて来て」

そう言うと、男はクルツと振り向いて教室から出ていった。
夏未は溜息をつき、仕方ない、と思いながら男の後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8242y/>

イナズマイレブン～未来からの逆襲・愛は世界を救う～

2011年11月24日17時53分発行